

「輝く街の灯りは届かない」

ルカによる福音書 2 章 1～12 節

日本キリスト教団勝田教会牧師、本学講師 鈴木 光

メリークリスマス！

皆さんこんにちは。日本キリスト教団の勝田教会の牧師で、聖学院大学で講師をしています鈴木光と言います。今日は皆さんとクリスマスの喜びをこの礼拝で共にできますこと感謝です。

さて、早速ですが、皆さんは「クリぼっち」という言葉を知っていますか？

「クリスマスに独りぼっちなんてかわいそう～」という、いわゆるリア充(リアルが充実している人)がそうでない人に謎のマウントをとって使う表現ですね。そもそもクリスマスはイエス様の誕生を皆で祝う時ですから、日本の謎文化で考えられているような恋人同士で過ごすイベントではありませんし、彼氏彼女がいるとリアルが充実しているとも限らないだろうと言う心の中のツッコミもあります。

ところが以外にも実際のクリスマスを知ると、その主人公であるイエス様こそがまさに究極の「クリぼっち」なのです。クリぼっちにこそ、クリスマスのメッセージの核心があるとも言えます。

ということで、今日は一緒にその実際のクリスマスの様子を聖書の御言葉から見ていきたいと思えます。

1. 「イエス様はクリぼっち。迎える人が必要」

まず、6～7 節を一緒に読んでみます。こうありました。

「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」

最初に注目したいのは「ベツレヘム」という町の名前です。イエス様が誕生したのはベツレヘムという村でした。

実はここはイエス様の両親になるヨセフとマリアの住んでいる所でもないし、この後、育つ町でもないのです。本当に生まれたのがここ、というだけの場所です。

余談ですが、私は出生地は横須賀なのですが、そのあとすぐに親の仕事の都合で引っ越しましたので出生地の記憶はありません。まさにそんな感じでただ出生地だというだけの土地がベツレヘムなのです。

では、なぜベツレヘムで生まれたのか？

それは今日の個所の 1～3 節に書いてあるのですが、皇帝アウグストゥスの住民登録の命令のためでした。

当時、ユダヤの人々はローマ帝国の支配下にありました。そこで「皇帝が言うことは絶対」だったのです。結果、命令が出ましたので、それぞれが自分の一族の本籍地で登録することになりました。

基本的にこういった住民登録の第一の重要な目的は、国や権力者が税金をとりっぱぐれないため、ということがあります。そんな権力者の都合で、イエス様の両親となるヨセフさんとマリアさんは、ナザレと言う住んでる村から 150km も旅をしなければなりませんでした。

当時のことですから、もちろん徒歩ですし、しかも最短距離は山越えです。もし迂回してぐるっと回ればさらに遠くなります。

そんな中で聖書は、「マリアは月が満ちて、初めての子を産み」と語っています。何も無くても大変なその旅路だけど、マリアさんは妊娠中だったのです！

ちなみにこの妊娠も不思議な出来事での妊娠でした。同じルカの福音書の 1 章 26～38 節にはその顛末(てんまつ)が記録されています。

具体的にはマリアさんのもとに天使ガブリエルが現れて、おめでとう、あなたは男の子を生むよと告げます。マリアさんはまだ結婚前でしたし、聖書の教えにしたがってヨセフとは関係を持ったりしていませんでしたから、物理的にそんなことありえないですよ、といぶかしがります。すると天使ガブリエルは「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる(参照:ルカ 1 章 35 節)」と言いました。

つまり、神様の霊が直接マリアさんのお腹の中で肉体を持って生まれてくると言っているのです。これは普通の話ではなく、本当に神様の奇跡の話です。

そんなわけで、文字どおり神様が人間になったのがイエス様です。しかも、私たちを罪から救う、救い主としてイエス様は生まれました。

このクリスマスと言う出来事の第一に大事なポイントは、神様が私たちのために人間となって生まれた、ということなのです。

話を元に戻しますが、いずれにせよ、妊娠中にこの旅はきついです。「マリアは月が満ちて、初めての子を産み」とあるとおり、臨月で、初産です。

伝承によればマリアさんは当時、15～16 歳くらいだったと言われています。ですから想像してみてください。ここにいる皆さんよりも若いお嬢さんが、権力者が税金を集めたいばかりに、不安な初産にも関わらず危険な旅を強制されるのです。まさに世の中の人間の罪の姿と、そこから生まれる弱者へのしわ寄せが凝縮されているようです。

さて、そんな中でイエス様が生まれたのは一体どんな場所だったのでしょうか。

一般的にはよく「馬小屋」と言われますが、実際は「馬小屋」とは限らないのです。では、なぜ馬小屋と言われるかと言うと「飼い葉桶に寝かせた」と書かれているからです。ようは動物たちが餌として食べる飼い葉を入れるものですね。でも、日本語で「桶」とは訳されていても、私たちの想像するやつとはどうも違ったみたいです。

この時代の考古学の研究によると、動物たちがよく飼われていたのは洞窟みたいなところで、飼い

葉は大きめの石の上のところを窪ませて、そこに置いて食べさせていたのだそうです。ですから、私たちが桶でイメージする木のバケツみたいなやつではなく、冷たい大きな石の上に飼い葉がしかれ、そこに両親の愛情でせめてもの布にくるんで寝かせられたということです。

では、なんでそんな寒々しくて、衛生的にも最悪そうなところで生まれることになったのでしょうか。それは「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから」と書かれています。

ヨセフとマリアがそうであったように、他にも住民登録で同じようにこの町に集まってきた人たちでベツレヘムの村はごった返していたからです。

…にしても、ひどい話だと思います。なんで誰も助けてあげないのでしょうか。10代半ばの女の子がもうすぐ出産だと聞けば、じゃあ部屋をゆずってあげるよという人がいなかったのでしょうか。

でも、それが今も昔も変わらない人間の世の中の現実かもしれないですね。言ってみれば、イエス様はどこにも居場所がなく、誰からも気づかれることのない存在として生まれたのです。

まさに、究極の「クリぼっち」なのです。

しかし、実はそれこそが聖書のメッセージです。すなわち、イエス様は迎えてくれる人がいなければ、どこにも居場所がないものとして生まれた方で、あなたが迎えることを願って生まれたのだということです。

2. 「イエス様を迎えたのは誰？」

次に8～9節を読んでみましょう。

「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」

最初にイエス様を迎える人になったのは、「羊飼い」たちでした。

羊飼いは昔の表現で言えば「3K」の仕事でした。つまり「きつい、きたない、きけん」です。羊たちを連れて餌場を探してしょっちゅう旅をしています。ずっと野宿の旅生活できつい、汚い。しかも強盗や野犬など羊への危険も多いですから、簡単な武装もして、いつも警戒している危険な仕事です。そんな彼らですから、世の中の的には底辺の仕事と見なされていました。

一方で、羊は当時の社会の主要な財産で、食物にもなれば様々な衣類や道具の原料にもなくてはならない重要な存在でした。いわば、人々の生活のライフラインを守る重要な仕事でもあったのです。

皆さん、聖書を読む時のコツは、登場人物を自分と違って読んでみることです。

そういう意味では、ここに出てくる羊飼いたちは私たちの代表者でもあります。すなわち、真面目に一生懸命生きてる(ならば)私たちそのものでもあるのです。

さあ、その日、彼らは街の明かりから遠く離れた暗いところにいました。街の光は届かない寂しい場所で野宿です。

ところが、そこに街の明かりなんか比べ物にならないような大きな光が彼らを照らしたのです。それは神様からの光でした。天使たちが現れて、彼らに素晴らしいニュースを届けたのです。まるで、「私はあなたたちを知っているよ。あなたを選んだよ」と呼びかける神様の声です。

この時期は世の中は(イベントとしての)クリスマスの喧騒に包まれます。街はネオンで照らされ、お祭り騒ぎ感があります。

しかし、その華やかさとは対照的なところに本当のクリスマスは起こりました。

皆さん、もしあなたが一生懸命生きているなら、あなたのためにイエス様は生まれました。それが、この羊飼いを通してのクリスマスのメッセージなのです。クリスマスはどこか遠い昔の遠い国の話ではなく、今を生きているあなたの話なのです。

3. 「イエス様はどんな方？」

最後に 10～12 節を読んでみましょう。

「天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。』」

天使はイエス様の誕生が「大きな喜び」で、それはつまり「あなたの救い主」が生まれたということだと話します。

クリスマスは大きな喜びです。でも、それは単なる「わーい、わーい」というノリだけのものではありません。

クリスマスの本当の喜びは、イエス様は「救い主」だということにあります。つまり、あなたを「罪と滅びから救うため、十字架にかかるため」に生まれた方なのです。

皆さんにはご家族や近い人など、きっとあなたを愛してくれている人がいると思います。でも、それだけではなく、あなたのためにこれから一生を生きて、あなたのために十字架で命を懸ける人が生まれたよとイエス様の誕生は告げているのです。

あなたは命懸けで思われています。それを愛と呼びます。「あなたは愛されているよ！」これがイエス様の誕生をとおしての神様があなたに語るメッセージです。

言い方を変えれば、わたしは愛されている、神様が私を愛している、これこそがクリスマスの喜びなのです。

天使たちは飼葉桶の赤ちゃんが「しるし」だといいます。

クリスマスに生まれた赤ちゃんのイエス様は、神様があなたを知っていて、見ていて、愛していて、迎えてほしい！と言っているというしるしです。

どうぞこのクリスマスの時、イエス様を信じてあなたの心に迎えてください。祝福をお祈りいたしま

す！

2023年12月20日 聖学院大学 クリスマス礼拝